

庄川美術館友の会発行

# 友の会だより

令和4年度 第1号  
2022.6.30

他館鑑賞会(金沢方面)

## 日展金沢展と二俣本泉寺

(2022.6.8)



内陣上、絢爛豪華な「松扉山」山号と横山作太郎作「飛天来迎図」

立て置きし庭の石木も変わるなよ また二俣の春にあふべし

豊吉の流れも清き二俣の 光はなほも澄める水かな

つくづくと思ひくらしして人相の 鐘の響きに弥陀ぞ恋しき

(蓮如が本泉寺を去る時の歌)

6月8日(水)、庄川美術館友の会総会及び他館鑑賞会を行いました。三十人が出席して行われた総会では、石黒信雄会長より「令和4年度もよろしく願いたい」旨のあいさつがありました。令和3年度事業報告及び決算報告(監査報告)、令和4年度予算及び事業計画が承認されました。

研修会では、金沢方面にバスを走らせませす。雄神トラベル(上田昭二社長)の企画で「加賀二俣 松扉山・本泉寺」を訪ねます。同寺は嘉吉2年(1442年)如乗(蓮如の叔父)による創建。1457年本願寺第七世・存如が亡くなると、継母如円は実子応玄に跡を継がせようと画策しますが、越中井波の瑞泉寺の如乗は「蓮如こそ正當な後継者」と主張して、蓮如を本願寺八代住職にすることに貢献しました。その後、蓮如は本泉寺にも逗留し、加賀の拠点にしました。赤い瓦屋根が印象的な本堂に入ります。内陣「飛天来迎図」の唐狭間9面は、井波の名工・横山作太郎(号 白汀 明治5年〜昭和13年)の作。絢爛豪華な作風に一堂目を見張ります。藤井住職(庄川出身)によれば、かつて井波彫刻を目指す若者がこの唐狭間を見によくやってきました。

綽如上人庵室跡(本願寺第五世綽如が、本願寺創建前、京都から井波へ向かう途中に休憩したと伝わる)で寺宝をご紹介戴き、同室から望む「九山八海の庭園」を拝見(文明7年(1475年)蓮如によって、亡き叔父への感謝と慕いを込めて築造、石川県最古の庭園として県文に指定)。「九山八海」とは阿弥陀如来の浄土を中心とした世界を象る須弥山。9つの山と8つの海で表されるに由来しています。池畔には蓮如が本泉寺を去る時の思いを3首の和歌に込めて刻んだ御詠歌石があります。

本堂脇には三角屋根の珍しい形をした手水舎(文化庁の有形文化財に登録)。文政6年(1823年)建立の二層建の山門は上層に鐘楼があります。緑深い二俣町の只中にある本泉寺は蓮如ゆかりの遺物が多く残された蓮如ゆかりの由緒ある寺院です。



藤井住職(庄川町古上野出身)に丁寧に寺内を案内してもらう



山門の上層には鐘楼が収まる



瓦が赤茶なのは前が銅葺だったからとか。平成26年修繕。



三角屋根が珍しい手水舎



本泉寺本堂前で



蓮如作庭「九山八海の庭園」 本堂へ通ずる通路から庭を望む



本泉寺は二俣町という、小谷の中にあつた



樹種談義。某氏「楠だらう」

国立工芸館は初めての見学でしたが、どこか東京の工芸館の雰囲気もあったのが面白く感じました。新しい国立工芸館は旧陸軍施設二つを移築統合して建てられています。金沢は前々回訪れた「寺島蔵人邸」のような古い文化財も残り、何度訪れてもおもしろく、さすが懐が深いといった観を持ちます。(末)



バスを降りてからのアクセスがとてもしっかり

最後は金沢駅構内「金沢百番街」に立ち寄り、修学旅行の生徒で賑わうお土産売り場に混じって銘菓をひとつ。

金沢は観光名所、施設が多く、新幹線敷設の恩恵もあり、さらに進展した観があります。美術館側には新しい駐車場が設けられ、アクセスが格段に良くなりました。

国立工芸館は初めての見学でしたが、どこか東京の工芸館の雰囲気もあったのが面白く感じました。新しい国立工芸館は旧陸軍施設二つを移築統合して建てられています。金沢は前々回訪れた「寺島蔵人邸」のような古い文化財も残り、何度訪れてもおもしろく、さすが懐が深いといった観を持ちます。(末)



奥に国立工芸館、右隣は石川県立美術館

住職より丁寧なご案内を戴いたあと、一行は出村町にある石川県立美術館へ。ここでは出村町にある石川県立美術館へ。ここでは「第8回日展金沢展」が開催されており、砺波市出身の洋画家・藤森兼明氏（日本藝術院会員）の作品が発表されています。近年の藤森作品はお孫さんをモデルとし、澆刺とした若さが印象的な赤、金色の絢爛な世界を放っていました。見応えある一作でした。又、工芸美術部門では織田定男氏の作品が特選となっていました。

KKRホテル金沢でおいしいお弁当に舌鼓を打った後、再び出羽町に戻り、石川県立美術館のお隣に2020年秋にオープンした「国立工芸館」の「未来へつなぐ陶芸 伝統工芸のチカラ展」へ。こし日本工芸会陶芸部会が50周年を迎えたのを記念して開かれています。富本憲吉、荒川豊蔵、三代徳田八十吉、十四代今泉今右衛門、松井康成、加守田章二といった、近代陶芸の名作はもちろんのこと、新進作家らの最新作をも紹介し、伝統工芸の幅広い世界を多数の作品で紹介していました。ケース陳列だったので、じかに観覧できる個所も多くあったのが嬉しく感じました。松田権六の仕事部屋は廻り込め、いろんな角度から眺められるとても贅沢な設定となっていました。